

# 地域ではぐくむ人権文化と子ども

北九州市人権啓発映画制作に関する検討会議議長 中島 俊介

「ボクの友達**は**ボクが選ぶ」。毅然と希望は母親に言います。ともすれば未熟だとして見落としがち**な**子どもの人権について考えさせられる場面です。「10歳までの経験がライフスタイルに影響を与え続ける。だから、心の中に住む10歳の子どもが大人の自分を一生操縦する」という考えが発達心理学にあります。私たちは子どもだからと侮ることなく、その胸中の大人と対話・共生する姿勢を取りたいものです。映画でのおばあちゃんが自然とそれができた原因は自分の地域での戦争体験でした。

「忘れないでね、この国に戦争があったことを」。戦争が起きてもっとも悲惨なのは、社会的立場の弱い人々であり子どもたちです。村上春樹氏はエルサレム賞受賞スピーチ(2009.2.15)で小説を書く際の心掛けを「高く堅牢な壁と、そこにぶつかれば壊れてしまう卵があるなら、私は常に卵の側に立とう」と述べました。

よく知られるように北九州市(小倉)は、1945(昭和20)年8月9日に長崎に投下された原子爆弾の投下第一予定地でした。小倉に飛来した原爆搭載機は、折からの悪天候に加え、前日8月8日の八幡大空襲の焼夷弾の煙のため目標地を目視できず、小倉市街地上空を3回旋回して長崎に方向を変更しました。この事実を踏まえて北九州市は、人権文化薫る平和実現と核兵器廃絶の礎となる資格と使命を自覚し「北九州市非核平和都市宣言」(2010.2.10)を行いました。この作品で取り上げた、「八幡大空襲」はこの意味からも忘れてはいけない大切な8月の記憶なのです。私たちの心の中に住む「ボクとガク」を育て、信じたいものです。

## あらすじ

八幡東区・商店街のスーパー。小学5年生の藤村希望は、同じクラスの横田岳が弁当を万引きするのを目撃した。岳は一緒にいた妹とともに事務所に連れていかれる。店長である希望の父・哲夫は岳の母・千秋を呼び出すが、千秋はいきなり岳を激しく叩く。哲夫は千秋の態度に腹を立てた。その話を聞いた希望の母・玲子は、希望に岳とあまりかかわらないようにと言う。

翌日、岳は学校を休んだ。希望が岳のアパートを訪れると、岳は熱を出して一人で寝ていた。岳の両親は離婚しており、母・千秋は昼も夜も働いていて、仕事を休めないという。岳がかわいそうになった希望は自分が看病をしようとする。その折に知り合ったアパートの2階に住む杉内美代というおばあさんが一緒に看病をしてくれる。

仲良くなった希望と岳は、ある日商店街で美代と偶然会った。途中で荷物を下ろし、一休みしながら歩いている。そんな美代を見て希望と岳は荷物運びを手伝う。美代は喜び、二人に「困った時はお互い様」という言葉を教える。帰宅した希望は哲夫に「買い物した荷物を自宅まで届けるサービスはできないか」と提案する。しかし、哲夫は『子どもの意見』をまともに聞こうとしない。

数日後、岳の家に自慢のおもちゃのフィギュアを見せに行った希望は、岳が千秋に激しく叱られているのを見る。同情した希望は持ってきたフィギュアを岳にやろうとするが、その言い方が岳を怒らせけんかになる。そんな二人を仲直りさせるために特製の焼きうどんを振る舞ったのが美代だった。

いつのまにか仲直りする希望と岳。美代は、そんな二人に1945(昭和20)年の八幡大空襲で兄を失った話をする。二度と戦火で家族が引き離されることがないように願っていると。美代の家から希望と岳が帰ろうとした時、美代が胸をつかみひざから倒れる。驚く希望と岳は救急車を呼ぶ。幸い一命を取り留めた美代は、見舞いに来た希望の両親と岳の母と初めて話をする。

希望と岳は夏休みの工作で商店街に置いてもらうベンチづくりをしようと決心する。そのことを聞いた哲夫は、商店会会長の浅見と相談して商店街の活性化につながるイベントを8月8日に決めた…。

